

入選

膝小僧の印

千葉県 睦沢中学校

一年 田中 仁子

「君、大丈夫？」

車の窓を開けて、おじさんが心配げに私に声をかけてくれた。いつも通りの朝になるはずだった。

元気に家を出発して、毎朝すれ違う友だちのお父さんに手を振る。それが私の日課だ。

その日は雨上がりの朝。そこに危険があるなんて。

「ガツン、バタン」

歩道に植えていた草にタイヤをとられ、私の自転車は思いっきりスリップしてしまったのだ。

一瞬、なにが起こったのか理解ができなかった。買ったばかりの自転車は大きく曲がり、アスファルトに強く打ち付けた左ひざは焼けるように痛み出した。

私は、左ひざから流れる血を見て、パニックになってしまった。すると、私のそばに、一台の車が止まった。

「君、大丈夫？」

車から出てきたのは、私の父と同じ世代の優しいおじさんだった。

その人は、私のけがを見て急いで止血をしてくれた。私は、足の痛みとは別に、おじさんの優しさに安心して涙がこぼれそうになった。

コロナがはやり出して、ソーシャルディスタンスが叫ばれる時代に入った。私はずっと、違和感を覚えて生活していた。本来、人と人は、近い距離で支え合って生きていくべきだと思うからだ。

「ここから家と学校どっちの方が近い？ 近い方で手当てした方がいいよ。」

おじさんに促され、私は自宅に戻ることにした。心配するおじさんにお礼を言って、来た道に戻り始めた。その後、傷の治療で病院に通院することになった。どうやらこの傷は跡に残るらしい。

病院の先生と母は、

「女の子なのにかわいそうだ」

と言ったが、私はそうは思わない。

私はこの傷を見るたびに、おじさんの優しさを思い出すだろう。私の左ひざには優しさの印が刻まれている。

この優しさをいつか、誰かに伝えたい。